

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

<書評と紹介>

出版者	法政大学史学会
雑誌名	法政史学
巻	48
ページ	158-163
発行年	1996-03-24
URL	http://hdl.handle.net/10114/10524

〈書評と紹介〉

白川部達夫著

『日本近世の村と百姓の世界』

佐々 悦久

百姓の世界とは兵農分離制のもとで、百姓が創り出した自立的な世界である。本書はこうした百姓の世界の展開をささえる社会結合や社会意識の発展を明らかにすることを課題としている。構成は全二部六章からなる。

序章 百姓の世界像をめぐって ―課題と方法―

Ⅰ 百姓の世界の基層

第一章 近世質地請戻し慣行と百姓高所持

第二章 百姓の世界の成立と百姓結合

第三章 百姓の世界意識の基層 ―迷惑・我儘・私欲―

Ⅱ 百姓の世界の展開と社会結合

第一章 元禄期の山野争論と村

第二章 享保期における村落共同体と祭祀問題

第三章 古河藩宝暦一揆の展開

終章 百姓の世界の射程

以下、各章の内容をかんたんにご紹介しておこう。

Ⅰはこの著作の主題にあたる部分で、百姓的世界の基層として「所有・社会結合・自由」の三つの側面に着目し、それぞれの側

面を各章で論じている。

第一章では、一八世紀から一九世紀にかけて広範に見られる質地の無年期的請け戻し慣行の具体的な分析を通じて、百姓高所持のあり方を社会意識にまで立ち入って明らかにしている。

第二章は一八世紀初頭に成立する百姓的世界の形成をささえた百姓結合のあり方や結合意識について考察するもので、内容は二つの部分からなっている。まず前段では、正徳三年に起こった下総古河藩の上がり年貢訴訟闘争を事例に、訴訟にあたつて村内で、名主と惣百姓の間に起請文と頼証文が同時に作成されている点に着目する。これは訴訟を代表するものに対する保障を定めたものであるが、この時期、こうした起請文を作成しなければならぬ点に、「村に本来備わっていた保障機能の信頼性がゆらいでいる」ことを指摘し、後段では古河藩領の同時期のいくつかの村落の事例を中心に、村規制の問題や村内の家格秩序の再編や動揺の問題など、小百姓の成長にともなう村の百姓結合の変化を分析している。

第三章は村方騒動の関係文書に使用される特徴的な非難文言「迷惑・我儘・私欲」の言語や使用例の分析により、百姓の正当性意識の展開を論じている。こうした研究はこれまでの村方騒動研究ではあまり省みられなかった問題であり、今後の展開が注目されよう。

つぎにⅡ部は各論にあたるもので、Ⅰ部で論証した百姓的世界の展開と、そのなかでの社会結合のあり方をめぐる論文三本を収めている。

第一章は、元禄二年～三年の茨城県筑波郡小田村と太田村の山野争論の分析により、村社会のあり方を論じている。小田村側のとった「鎌取り」という中世からの伝統的な解決法に対し、太田村側の頼み証文を作成し村中合意に基づく結果方法をとる点に着目し、その意味について述べている。

第二章は、享保期の常陸西部の農村に多い村落祭祀をめぐる争いを分析することにより、初期本百姓を中心とした村落身分秩序が変質していく過程を論じている。

第三章は古河藩宝暦一揆の内容紹介とそのなかで展開される百姓結合のあり方について論じている。このなかで、宝暦一揆が名主や村役人層を含む惣百姓結合の形態をとりながらも、同時に村落内部では村役人層と小前百姓層とが対立するという矛盾をはらむものであったことを指摘している点が注目されよう。

以上、第Ⅰ部はともかく、第Ⅱ部については全体を通しての整合性は薄く、それぞれ独立した論文として読まれるべきであろう。

内容的には、戦後歴史学の中心であった村落構造的な分析や枠組みとはことなる社会史的な方法論や問題意識が多く採り入れられている。きわめて意欲的な著作であり、今後に多くの新たな問題点を提供する書として、高く評価されるものである。

(校倉書房 七二〇円)

武光誠・佐藤和彦・村上直・安岡昭男編

『日本史用語大事典』

本書は一九九一～九三年に出た『古代史用語事典』(武光)・『中世史用語事典』(佐藤)・『近世史用語事典』(村上)・『近現代史用語事典』(安岡)を調整合体し、その際かなり用語を増補し、計一万七千項目と称している。一項目約百字におさえ用語数を多くしており、関連項目を次に引くことにより利用価値が高められよう。

本学関係執筆者は共編者(村上直・安岡昭男)に、近世が川口素生・佐藤豊巳・筑紫敏夫・中里行雄(いずれも編集協力)、近現代では岩壁義光・柏木一朗・佐藤正典・富塚一彦・長井純市(以上編集協力)・生田澄江・石川(横山)恵美・狩野雄一・川畑恵・川本勉・川原崎剛雄・小松田知子・斉藤勉・高橋節子・湯本豪一(五十音順)。

(A5判 一二七〇頁 定価二八、〇〇〇円 新人物往来社 一九九五年八月刊)

馬場憲一著

『近世都市周辺の村落と民衆』

池田 昇

本書は、著者が大学を卒業して引き続き大学院を修了され、その後も研究を行ってきた成果をまとめたものである。現在にいたるその間において、著者は東京都教育庁学芸員として、きびしい職場環境のなか、仕事と研究を両立させてこの書を成しておられる。まずは敬服したい。

著者は「あとがき」にもあるように（１）江戸幕府勘定所を中心とする論考、（２）幕府下級武士団である八王子千人同心、（３）近世都市江戸周辺の地域史について、四〇数本の論文を書かれている。本書は、そのうち（３）を中心にして一書にまとめられたものである。そして、そのねらいとするところは、近世都市江戸の影響をうけて独自の歴史を展開させていた江戸周辺の地域性やその歴史像を描き出すという点に求めている。

そこで、本書の構成は示せば、つぎのとおりであり、その概要を紹介していきたい。

序 章 近世都市周辺地域史研究の視点

第一章 江戸近郊の水利と農民生活

第一節 低地帯農村の水利とその維持管理

第二節 低地帯の河川管理と治水

第三節 鷹場内農民の生活と鷹野御用

第四節 江戸近郊農村の諸相

第二章 多摩の村落と農民の動向

第一節 土豪的農民の系譜と土着化

第二節 谷戸村落の生産基盤

第三節 谷戸村落における農民の存在形態

第四節 村明細帳にみる多摩川中流域の村落

第三章 豪農と在郷町の展開

第一節 一豪農にみる酒造業開業過程の様相

第二節 天保期における八王子町の動向

序章では近世都市江戸を取りまく地理的状况を概観し、著者の視点を述べている。

第一章は江戸近郊農村を研究対象にして、第一節・二節で東部低地帯農村における水利とその維持管理のための農民負担、洪水への対応、河川管理の実態を考察している。第三節・四節では武蔵野台地に点在する村落に焦点をあて、そこに設定された幕府の鷹場と農民との関わりや、農民階層・農民の諸負担、農間渡世、奉公人の実態などから近郊農村の諸相を究明している。

第二章は多摩丘陵と多摩川・秋川流域に開けた農村を対象に、第一節では多摩郡における土豪的農民の系譜と秋川流域での土着化の事例を明らかにしている。第二節は多摩丘陵の谷戸に点在する村落の歴史的な概観と農業生産・農間渡世の展開を巨視的に捉え、谷戸村落の生産基盤を考察している。第三節は第二節をうけて、谷戸村落である一農村の土地保有形態・階層構成・通婚圏な

どを検討し、その実態に迫っている。第四節は多摩川中流域に位置する村落の様相を、とくに「村明細帳」の分析をとおして、畑作と肥料購入・農間渡世・市場との関わりなどを概観している。

第三章は江戸からやや離れた入間郡の村落と多摩郡の在郷町を対象にし、第一節では武蔵国西北部に展開する酒造業の様相と、そこにおいて酒造業を営む斎藤氏が一豪農として成長していく過程を寛政期の江戸地廻り経済圏育成のなかで捉えている。第二節は在郷町八王子にあって天保飢饉時における窮民救済仕方など町方立て直しの実態を検証している。

このように概観してみたが、本書には近世都市周辺村落の歴史像を描き出すという観点から、江戸周辺地域を対象にした論文がバランスよく配されているといつてよい。しかし、それらの論文は長い年月にわたって書かれているので、個々の間には若干、研究視点が相違する点、気がかりである。

そして、これはあくまでも筆者の思うところであるが、第二章第一節、第三章第一節・二節は、著者の問題関心のなか分析が充分になされているといえよう。しかし、惜しむらくは全体をとおして、さらに史料分析を充分にされ、著者の考え方を提示してほしいように思われる。

ところで、本書の冒頭には研究対象とした地域のかつての姿を表す写真が豊富に掲載されている。これらは変貌著しい周辺農村の過去の姿を映し出すものであり、近世期にまでさかのぼってイメージすることも可能であろう。これらの農村に残された史料によって研究がなされ、本書が結実したのである。掲載された写真

書評と紹介

は本書を理解するうえで十分な助けになるといってよい。

著者は「あとがき」で今後に残された研究上の課題が多いとされるが、以上の研究は周辺村落を多くの史料によって、まんべんなく丹念に検討されており、これによって江戸周辺の地域的な特質が明らかにされたといえるであろう。

本書は、歴史研究者だけではなく、近代都市東京周辺に暮らす住民にも地域の過去を知るうえで一読を勧めたい書である。

〔平成七年五月刊 A5判 二五〇頁 四九四四頁 雄山閣出版〕

【会員編著書抄】

村上直・安岡昭男他共編

『日本史用語大事典』

安岡昭男著

『明治前期日清交渉史研究』

石井正敏共編

『善隣国宝紀』

百瀬孝著

『事典・昭和戦後期の日本——占領と改革——』

村上直校訂

『竹橋蠹簡・竹橋余筆』

湯本豪一編

『統美術館・博物館は「いま」 日外アソシエーツ 村上直校訂

『新訂・民間省要』

丹治健蔵著

『近世交通運輸史の研究』

新人物往来社 平成七

巖南堂書店 平成七

集英社 平成七

吉川弘文館 平成七

文献出版 平成七

平成八

有隣堂 平成八

吉川弘文館 平成八

平成八

「高幡山金剛寺文書目録」の刊行

村 上 直

高幡山明王院金剛寺は、日野市高幡にある真言宗智山派の別格本山であり、通称では高幡不動尊と呼ばれ、関東三不動の一つに数えられる名刹である。この高幡山金剛寺の歴史は、応永二二年（一四一五）二月、発願者兼海の依頼をうけた深大寺（調布市）の長井が案文した勸進状によると、金剛寺の不動堂は大宝年間（七〇一―七〇四）以前に草創されたとあり、また、縁起による寺伝では貞観年間（八五九―八七七）に慈覺大師円仁が清和天皇の勅願によって東関鎮護の靈場と定めて不動堂を創建し、これに不動像を奉安したのに始まると伝えられ、元慶年間（八七七―八八五）には陽成天皇の御願寺となっている。この不動堂はのちに中興の祖といわれた住僧の儀海上人のおとき本尊諸尊の修復を行い、現在の不動堂の地に移建されたといわれている。

金剛寺は不動尊の「胎内文書」によって、中世の貴重な史料として広く知られるようになった。近世になると天正一八年（一五九〇）八月、関東へ入国し江戸を政治的拠点とした徳川家康は、翌一十九年一月に不動堂領として三〇石を寄進したが、やがて金剛寺は智山派の関東十一談林の一寺として繁栄した。特に火防の不動信仰と談義所の二つの性格をもつことによって、末寺三〇か寺を含めて寺院の発展がみられたのである。しかし、安永八年

（一七七九）の大火によって、寺城の伽藍が焼失したため、その後の歴代の住職は鋭意、金剛寺の復興に務め現在に至っているのである。

この金剛寺の文化財については、先に日野市教育委員会（東京都教育委員会との合同調査）による『日野金剛寺（高幡不動）文化財調査報告』『高幡山金剛寺典籍・聖教文書目録』（昭和六三年三月）、及び日野市史編さん委員会『日野市史料集・高幡不動胎内文書編』（平成五年三月）が刊行されているが、なお、貴重な文書類が未整理のまま所蔵されていた。

法政大学多摩図書館地方資料室では、高尾山薬王院文書の刊行に続いて、平成四年七月から文書類の整理と文書目録の作成の作業を行ってきたが、すべての文書類の整理と分類が完成し、『高幡山金剛寺文書目録』（B5判、一八一頁）が平成六年（一九九四）三月に刊行された。この目録ははじめ段木一行教授を団長として作業が開始されたが、同教授が平成五年に国外留学のために渡英されたため、平成五年度から村上が団長となり調査団を再編成し作業を進行させた。

団員は団長の他、安岡昭男・関口恒男（経済学部）両教授と馬場憲一（講師）氏、調査員には新城美恵子（大学院博士課程修了）、河野朝子、岩橋清美（大学院修士課程修了）と柳下顕紀・武藤真君他十数名の村上ゼミの学部生が参加した。「文書目録作成経過」は古文書の分類・整理に四六日間、（平成四年八月―同五年五月）、史料分類・目録原稿作成に四二日間（平成五年六

月（同年一〇月）、目録原稿点検は一四日間（平成五年一月（同一二月））に及んだ。

本目録は調査対象文書総件数は約七、八〇〇点、目録掲載文書数一、七〇六点、しかし関連史料を加えると史料実数は四、二二一点となり、調査活動期間は約一七ヵ月、実動活動日数一一五日、参加人員延べ五四七名になっている。

金剛寺文書の分類はA寺歴住職、B信仰・行事、C寺院経営、D談林、E門末寺院、F法類・諸寺院、G本山・本寺、H寺院行政、I社会情勢、J地域社会、K典籍・書画、L土方家文書の一・二項目から成っている。全体として大項目と関連文書による枝番号を付した小項目に分かれるが、大項目の点数では寺歴住職（四二七点）、門末寺院（三五四点）、信仰・行事（二四一点）、法類・諸寺院（一八八点）、寺院経営（一五八点）、典籍・書画（一四八点）の順になり、続く六項目は各項目ともに八六点以下となっている。本目録によって、はじめて高幡山金剛寺文書の全貌が明らかになったわけである。文書の内容については、江戸期と明治・大正期が中心であるが、とくに元禄年間（一六八八―一七〇四）の門前百姓の家族構成やその実態、歴代住職別の関係文書、門末寺院の二三か寺に関連する文書。また、昭和一四年から二一年に至る日中・太平洋戦争の戦時下における寺院の動向を知ることができる貴重な史料が多数含まれている。

法政大学多摩図書館の地方資料室では、これらの主要な文書を上・下の二巻にまとめ、文書集として刊行する予定である。

このうち上巻は、寺歴・住職、信仰・行事、寺院経営、談林、

書評と紹介

典籍類の五項目一七三点の文書が収録されている。なお、関連する文書に枝番号を付すと一三八点に及び、これを加えると実際の収録文書は合計して三二一点となっている。これらの各文書には一点ごとに具体的にその内容を示す標題が掲げられてあり、巻末には収録文書について解説を記すことによって、文書の内容を多くの人びとが理解できるように配慮されている。

金剛寺の寺歴を理解していく上で基本的な史料といわれるのは、応永二二年二月に武蔵国多摩郡深大寺（調布市）の住僧長井が執筆した金剛寺所蔵の不動堂修造の勸進状（帳）である。これは金剛寺の僧乗海が平地に建立されている不動堂を山上へ再建しようとして計画したが、その資金を集めるために勸進状の作成が必要になった。そして、当時、文筆に巧みであった長井に依頼したのである。次の注目すべき史料は、文化一四年（一八一七）一二月に江戸後期の国学者・文人として知られた武蔵国多摩郡小山田村（町田市）出身の高田與清の撰による「高幡山不動尊縁起」である。この縁起によって金剛寺の寺歴の概要を知ることができる。

また、歴代住職は、南北朝期に金剛寺の中興の祖といわれた儀海を一世として、現在まで三三世に至っている。

なお、高幡山明王院金剛寺の三三三川澄祐勝實主は、法政大学のOBであり、多大のご協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。